

5-9 陸棲動物の化石

古琵琶湖層群から発見される哺乳類や爬虫類の化石は、約400万年間におよぶこの地域とその背景にある地球規模の気候変動や大陸との接続関係を教えてくれる貴重な資料です。

1. 残りづらい骨の化石

古琵琶湖層群は全国的に見ても多くの哺乳類や爬虫類などの陸棲動物化石が発見される地層です。化石には骨や歯だけでなく、それらの足跡化石も多く見つっています。このように化石が多く見つかるのは、約400万年もの長期に渡って水域や湿地が続き、動物たちが集まったり、足跡が残りやすい環境が多くあったことが大きな要因です。

古琵琶湖層群から発見される哺乳類や爬虫類などの化石は、古い時代から新しい時代まで様々な時代から発見されています(図5-9-1)。興味深いのは、骨や歯の化石が発見されないところからも足跡の化石は発見されていることです。足跡が発見されているということは、当然その時代には足跡をつけた動物が生きており、死体もたくさんあったのだと思いますが、骨や歯の化石はほとんど残らなかったのです。骨や歯の化石がいかに残りにくいかが伺われます。

2. ゾウ類の化石

古琵琶湖層群から発見される哺乳化石で最も多く発見されるのはゾウ類の化石です。この傾向は全国的に見ても同様です。ゾウ類の化石は時代が移り変わるとともに種類も代わっていくのが特徴で、古い方から順番にミエゾウ、アケボノゾウ、シガゾウ、トウヨウゾウの4種類が知られています。さらに古琵琶湖層群よりも新しい時代からナウマンゾウも発見されています。これらの中で江戸時代に天津市南庄で発見され龍骨と騒がれたトウヨウゾウ、志賀の名前がついたシガゾウ、一体分近い骨格が発見された多賀町のアケボノゾウなどが注目されます。ただし、シガゾウは近年では、ムカシマンモスゾウに統一されたり、さらには、大陸で発見されているトロゴンテリゾウと同一のものであるとされる見解もあります。

3. その他の化石

哺乳類化石の中で次に多いのは、シカ類の化石です。カズサジカという種類のみがはっきりと種名がわかっています。このシカは今のニホンジカと同じくらいの大きさのシカでしたが、成熟しても角の枝は3本しかなく、ニホンジカが4本あるとは異なっていました。このほか、ウシ類、イノシシ類、ウサギ類、ネズミ類などの化石が発見されています。

爬虫類の化石では、ワニ類とカメ類が発見されています。骨や歯の化石は上野層からのみ発見されていますが、足跡化石は上野層と甲賀層から発見されています。約250万年前まで琵琶湖にもワニがいたことは確かです。

4. 足跡化石

古琵琶湖層群の足跡化石は、約50箇所あります。これらは全国で知られているほぼ同じ時代の足跡化石産地の約半数であり、古琵琶湖層群から足跡化石がいかに多く発見されているかがわかります。足跡化石は間違いなくその場を歩いた跡(現地性)であり、群れで生活していたのか、速い速度で移動していたかなど生態的なことを活き活きと伝える点で重要な化石です。これらの動物化石の移り変わりの背景には、アジア大陸との接続や地球規模の気候変動が影響しています。

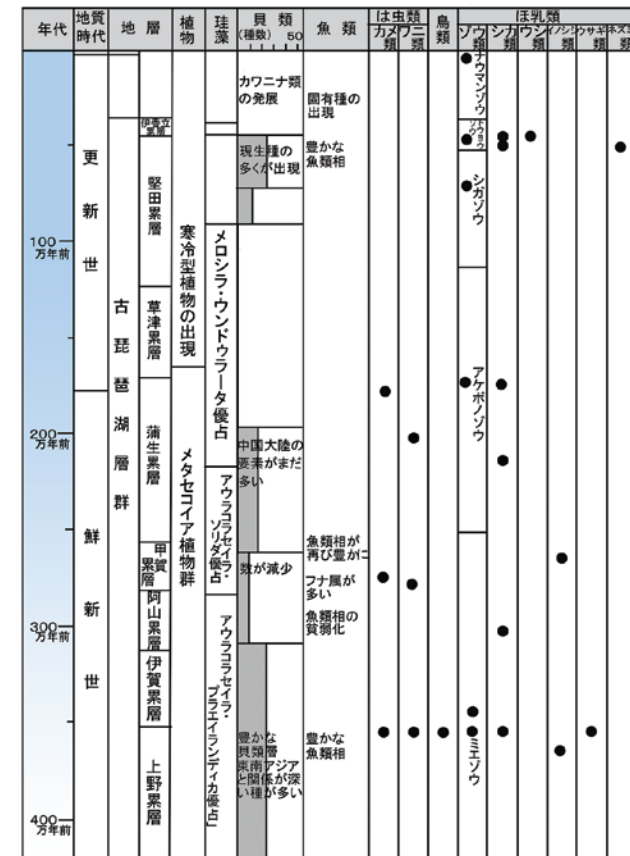


図5-9-1 古琵琶湖層群から発見される化石の移りかわり

琵琶湖博物館 高橋 啓一